

# 博士學位論文審査要旨

2017年12月8日

論文題目： 実存主義ソーシャルワークにおける環境と適合することの意味  
—D. Krill による援助枠組みの分析をもとに—

学位申請者： 田嶋 英行

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 木原 活信

副査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副査： 明治学院大学 社会学部教授 久保 美紀

要 旨：

エコロジカル・システム思考のソーシャルワーク論における人間存在への批判が本論文の問題意識としてある。その主要なモデルの一つと考えられる「生活モデル」は、人間と環境の交換という相互作用に焦点を当てるが、究極的には、それら両者の適合を追求しているという。「生活モデル」は、生態学という自然科学の一分野をもとにしており、その意味において、クライアント自体を、あくまで「あるもの（存在者）」であり、「その存在（あること）」として捉えていくことができない、と主張する。本来、ソーシャルワークにおけるウェル・ビーイングには、「よりよい状態」といった現象面だけでなく、さらに、彼ら自身が「ある（存在する）」ことの意味をも暗に含んでいる、と考えられる。

これらの問題意識をもとに、主に北米のソーシャルワークの先行研究を批判的に検討しつつ、人間の実存的存在者の重要性を主張した実存主義ソーシャルワーク (existential social work) に着目している。なかでもその先駆者である Donald Krill は、クライアントを実存として捉えつつ、かつそれを前提に、環境がどのように構築されていくのかについてまで射程に入れた援助枠組みを提示した。しかしながらこの Krill を援用しつつも、この援助枠組みだけでは必ずしも充分ではないと本論で批判する。なぜならそれは、実存として存在するクライアントが自らの環境と適合していくことの「意味」について、それではまだ充分には明示できていないからである。そもそもソーシャルワークが、クライアントの存在の意味を追求するならば、その最終目標である「環境との適合」の意味自体も、明らかにされていなければならないとするのが本論を一貫して貫く主張である。本論で、Krill による援助枠組みの見解を踏まえながらも、さらに、クライアント自身が実存として存在しつつ、自らの環境と適合することの意味を明らかにすべく、日本における現実への応用として高齢者福祉分野における実践を展開している。

本論全体として、ソーシャルワークの認識レベルでは説明できても、実践への応用（介入）にはまだ諸種の課題があるが、古典から現代のソーシャルワークまでの文献を十分に整理して現代において求められるソーシャルワーク論の構築を目指している点は評価できる。

よって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2017年12月8日

論文題目： 実存主義ソーシャルワークにおける環境と適合することの意味  
—D. Krill による援助枠組みの分析をもとに—

学位申請者： 田嶋 英行

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 木原 活信

副査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副査： 明治学院大学 社会学部教授 久保 美紀

要 旨：

2017年12月8日（金曜日）午後1時より午後2時40まで公開学術講演会を溪水館会議室において開催した。また同日午後2時45分より午後4時00分まで口頭試問、引き続き午後4時45分まで語学試験（英語）を溪水館社会福祉学科資料室において実施した。

公開学術講演会では、審査委員3名を含む一般聴衆のまえで、提出された博士論文について論理的に説明することができた。またフロアーからの質疑応答の時間においても明快に適切かつ丁寧に各質問に回答することができた。口頭試問では、専門分野（社会福祉学）において、博士学位取得者に相応しい能力と知識を有していることが確認された。語学試験（英語）においては、博士学位取得者に相応しい能力を有していることが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 実存主義ソーシャルワークにおける環境と適合することの意味  
—D. Krill による援助枠組みの分析をもとに—

氏名： 田嶋 英行

### 要旨：

現在ソーシャルワークは、社会のあり方に変革をもたらしていくものと規定されるが、一方で最終的に、人びとの「生活課題に取り組みウェル・ビーイングを高め」(IFSW 2014) ていこうとするとされている。そもそもこのウェル・ビーイングという概念は、世界保健機構 (WHO) による「健康の定義」で用いられており、おもに保健医療領域において、人びとが「健康」であることを表わすのに使われている。さらにこの概念については、これまで、具体的な計測方法も開発されている。ただし、ウェル・ビーイングという概念がソーシャルワークで用いられる場合、クライアント自身が、たとえば失業や障害、疾病、要介護といった状況にありながらも、その改善を図りつつ、一方で自らの存在 (あること) そのものが与えられていること自体を、肯定できるようにしていくことが求められる。したがって、ソーシャルワークにおけるウェル・ビーイングには、「よりよい状態」といった現象面だけでなく、彼ら自身が「ある (存在する)」ことの意味をも暗に含んでいる、と考えられるのである。

ソーシャルワークはこれまで、「目の前にいる」クライアントが抱える生活課題を解決しようとしてきた。つまり、クライアント自身が抱える課題をいかに客観的に分析し、さらにいかに彼らを科学的に支援していくのか、にもっとも力を入れてきたのである。また、クライアントをより客観的に捉えることによって対象化し、その「存在者 (あるもの)」としての側面に焦点を当てていく伝統は、生態学をもとに展開された「生活モデル」や他のモデルにも、脈々と受け継がれている。それではそもそも、クライアント延いては人間は、どのように存在するのであろうか。それは実存として、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」(茅野 1968 : 93) する、と考えられることになる。したがって、クライアントのウェル・ビーイングを考えていくには、彼ら自身が、そのように存在していることを前提にすることが求められる。

また今日のソーシャルワークにおいて、もっとも主要なモデルと考えられる「生活モデル」は、人間と環境の交換という相互作用に焦点を当てていくが、究極的には、それら両者の適合を追求する。しかしこのモデルは、生態学という自然科学の一分野を基盤にしており、クライアント自体を「あるもの (存在者)」として捉えていく。科学の対象は、あくまで「あるもの (存在者)」であり、その存在 (あること) を捉えていくことはできない、のである。

これまでに、クライアントを実存として捉えていったソーシャルワークのアプローチとして、実存主義ソーシャルワーク (existential social work) が挙げられる。なかでも Donald Krill が展開した援助枠組みは、クライアントを実存として捉え、その存在のあり方に着目しつつ、さらにその事実を前提に環境がどのように構築されていくのかまで射程に入れている。ただしこの Krill についても、援助枠組みとしては、必ずしも充分ではない。なぜならそれが、実存として存在するクライアントが自らの環境と適合していくことの「意味」について、十分に明示できていないからである。そもそもソーシャルワークが、クライアントの存在の意味を追求するならば、その最終目標である「環境との適合」の意味自体も、明らかにされていなければならない。したがって本研究では、Krill による援助枠組みの見解を踏まえつつ、さらに、クライアント自身が実存として存在しつつ、自らの環境と適合することの「意味」を明らかにしている。

本研究は文献研究である。具体的には、Krill 自身の見解や、それが依っている Martin

Heidegger の実存論的分析論をもとに、クライアント自身が実存として存在しつつ、さらに自らの環境と適合することの「意味」を追究している。そして最終的には、クライアント延いては人間の存在が与えられている（被投的存在）という事実を彼ら自身が引き受けることによって、そもそも、自身と環境が本来的に不可分であることを自覚することにある、と結論づけている。このことは従来の「生活モデル」によって、クライアントとその生活を外側から客観的に捉えていったのでは、けっして明らかにはできないのであり、クライアント一人ひとりの経験における内側の視点から、彼らの存在を捉え直していったとき、初めて明らかにできるのである。なおこれまでも、実存主義ソーシャルワークの研究がおこなわれてきたが、いずれもクライアントを実存として捉えているものの、存在（あること）に着目しつつ、さらにそのうえで、その環境のあり方に言及している研究は、Krill 以外に存在していない。本研究の独自性は、クライアントの存在に焦点を当てた Krill を引き継ぎ、さらに発展させたという点にある。

論文の構成であるが、序論、第1章から8章、そして終章から成っている。

第1章では、Krill が自らの援助枠組みを生み出した社会的背景について明らかにしている。Krill は「疎外」に悩む、すなわち自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあるクライアントを援助するために援助枠組みを展開したが、それは Krill が活躍した当時、それに悩むクライアントが数多くいた、ということでもある。ここでは、彼自身が自らの援助枠組みを展開した 1960 年代の米国社会のなかで、この援助枠組み自体がどのような役割を担おうとしたのか、明らかにしている。

第2章ではよりミクロな視点をもとに、Krill による援助枠組みの分析をおこなうことによって、「疎外」に悩むクライアントの具体的な援助の実際について明らかにしている。そもそも Krill は、自らが展開した実存主義ソーシャルワークの具体的な「援助の仕組み」について明記しておらず、その実際のあり方を明らかにしていくことが求められるのである。

第3章では、Krill による実存主義ソーシャルワークの独自性について述べている。Krill による援助枠組みでは、クライアントを実存として、さらに「世界=内=存在」として捉えていく。つまり彼ら自身を、「世界」においてア・プリオリに存在するものと位置づけていくのであり、まさにここに、その独自性があると考えられるのである。

第4章では、Krill による援助枠組みの限界性について述べている。Krill においては、「疎外」に悩むクライアントを援助することを目的としていた。しかしクライアントは現存在として、日常的に「頹落」した状態にあり、その「存在の意味」は不明のまま据え置かれている。それゆえクライアントを実存として、さらに「世界=内=存在」として捉えていくだけでは、「疎外」から解放することができない。ここに、この援助枠組みの限界があると考えられる。ここでは、Krill における限界性を、「世界=内=存在」という概念を提示した Heidegger の見解をもとに、検討している。

第5章では、Krill による援助枠組みの限界性を踏まえつつ、さらに、その特長を挙げている。具体的には、1) クライアントと環境を一体的に捉えようとしている点、2) 本来的な意味で「クライアント中心」の理念を実現しようとしている点、3) クライアント自身の存在のかけがえのなさを明らかにしている点、以上3つを挙げている。

第6章では前章において明らかにした、Krill による援助枠組みの特長を活かした、特別養護老人ホームにおける認知症高齢者への対応について、具体的な事例を通して検討をおこなっている。そこではとりわけ、クライアントおよび施設職員を実存としてかつ「世界=内=存在」として捉え、それら両者の「世界」のあり方に焦点を当てた援助について検討している。

第7章では、「環境と適合すること」の意味について論じている。そしてその意味を、クライアント延いては人間の存在が与えられている（被投的存在）という事実を彼ら自身が引き受けることによって、そもそも、自身と環境が本来的に不可分であることを自覚することにある、と結論づけている。

第8章では、ソーシャルワークの対象となるクライアントが、さまざまな「損害や喪失」を抱えつつ生活すること、とりわけ家族といった重要な他者を喪失するということについて、彼ら自身、具体的にどのような意味をもって体験していくのか、明らかにしている。そしてその際には、クライアント自身の経験における内側の視点から、そのこと自体どのように捉えているのか、Edmund Husserl による現象学をもとに把握している。

本研究の結論部分である終章では、自らの環境と適合することの意味は、前述の通り、クライアント延いては人間の存在が与えられている（被投的存在）という事実を自身が引き受けることによって、そもそも、自身と環境が本来的に不可分であることを自覚することにある、と結論づけている。さらに、1)「生活モデル」は、ひとと環境の一体性について強調しつつも、実際にはそれらを個別のものとして捉えているが、Krill による見解を基盤にした実存主義ソーシャルワークでは、存在論的次元から、ひとと環境を一体的に捉えていくことが可能であること、2) Krill による見解を基盤にした実存主義ソーシャルワークでは、個人がある（存在する）とはそもそも何か、その個人にとって環境がある（存在する）とはそもそも何かを問う、存在論をもとにしていることから、結果として、ソーシャルワークにおける介入の本質、すなわち、介入とは何か、を描き出していくことが可能なこと、3) ソーシャルワーク専門職が、クライアントを「環境のなかにあるもの」として捉えていく際には存在論とともに、現象学をも含んだ、いわば「存在論的-現象学的」な解釈の枠組みが求められること、4) ソーシャルワーク論にはその「本質」論が不可欠であり、本研究で論じている内容がその1つになり得ること、について述べている。

---

International Federation of Social Workers (IFSW) (2014) Definition of Social Work.

茅野良男 (1968) 『実存主義入門：新しい生き方を求めて』講談社。